伝説の
Legendary technology
テクノロジー
35

# オーディオ職人 今井清昭さん

## 真空管アンプが生み出す“本物の音”

コンサート会場で演奏されたときの音をそのまま忠実に再現したい。
そんな想いでひたすら開発を続けてきた。そしてたどり着いたのは、真空管のアンプだった。
トランジスタにとって代わられ、日本ではもはや生産さえされていない真空管を使って原音を探求し続けてきた今井清昭さん。
ヨーロッパの人々は尊敬の念を込めて、そんな今井さんを“オーディオのマエストロ”と呼ぶ。

### 原音に限りなく近い音を求めて

ＪＲ八王子駅から北へ車で10分ほど走ると、喫茶店のような外観の建物が道路沿いにある。今井清昭さんが経営するオーディオテクネインコーポレイテッドの工房だ。

この工房にはしばしば遠方からの客が訪れる。オーディオテクネがつくるアンプやスピーカーの評判を聞いて、青森や山形から来た音楽好きもいた。

そうした客を笑顔で迎えた今井さんは、とりあえず何も説明せずに、自社製品のオーディオでレコードやＣＤを聞いてもらう。

「ちょっと物足りない感じですね」

初めてオーディオテクネの製品で音楽を聞いた人は、そう答えることが多い。だが、そう言いながらもたいていの客がそのまま音楽を聞き続ける。3時間、4時間は当たり前。中には延々13時間もオーディオの前に座り続けた人もいたという。

「私たちは、いい音ではなく、原音に限りなく近い正しい音を求めています。そういう音は、一般のオーディオで音楽を聞き慣れた方には最初、物足りなく感じられるかもしれません。でもそういう音は、いくら聞いてもうるさくないので、皆さんつい時間を忘れて聞き惚れてしまうのです」

今井さんが穏やかな口調で言う。

大手メーカーがつくるオーディオは、重低音が効いていたりして、迫力がある。ベースやテナーサックスの腹に響くような音は、確かに“いい音”だ。だが、実際のコンサートやライブで聞く音とは違う。正しくない音というのは言い過ぎかもしれないが、つくられた音であることは紛れもない事実だろう。

面白いことにオーディオテクネのスピーカーは、そばにいても少し離れたところにいても、音質はもちろん音量もほとんど同じように聞こえる。そういえばコンサートでは、一番前の席でも最後列の席でも、演奏はほぼ同じように聞こえる。なるほど、これが原音に近いということか。

### トランジスタではできない！！

今井さんは音響メーカーなどに勤めた後、1978（昭和53）年、オーディオテクネインコーポレイテッドを設立した。当初はオーディオアクセサリーなどをつくっていたが、メーカーなどが必要以上に音質を変えてしまうことに疑問を感じていた。

「もっと本物の音を大切にしないと、日本のオーディオ産業は発展しない」

そんな危機感さえ抱いていた今井さんはある日、取引先から真空管アンプの製作を依頼された。これが大きな転機になった。手づくりで仕上げたアンプの音を聞いたとき、最初は今井さんも「迫力がない」と感じた。だが、もう一度聞いてみて気がついたのである。「コンサートで聞いた音楽は、こんな感じだった。こっちの方が本物の音なのではないか」と。

幸い、真空管アンプの評判は上々だった。これを機に今井さんは原音に近い音を求め、真空管のアンプづくりにのめり込んでいったのだ。

「レコードやＣＤに録音された音楽は、電気信号としてプレーヤーからアンプ、スピーカーに送られていくわけですが、部品を通過するたびに変化してしまいます。原音を再現するには、そうした変化を可能な限り少なくしなければなりません」

最初から真空管にこだわったわけではない。トランジスタでもできるだろうと考え、試してみたこともある。だが、トランジスタを使った場合、「NFB（負帰還）」と呼ばれる電子回路が大きく音質を変えてしまう。そ

**いまい・きよあき**　1942（昭和17）年生まれ。静岡県出身。工業高校卒業後、音響メーカーに就職し、ステレオに関わる仕事に従事。その後、8回の転職を経て1978年にオーディオテクネインコーポレイテッドを設立した。原音に近い音であるかどうかを聞き分ける耳を育てるため、かつては年に何十回もコンサートに行ったという。

今井さんの配線図はすべて手書き。コンピュータを使わないのですか？ の問いには、「CADを覚える方が大変ですから（笑）」とのことだった。

のためトランジスタは諦めざるを得なかった。単に昔懐かしいからという理由で真空管を使ったのではなく、原音を探求していった結果、たどり着いたのが真空管だったのだ。

## 米国、中国、ロシアから真空管を輸入

もちろん真空管なら何でもいいというわけでもない。いろいろ試してみて、今井さんが最終的に選んだのは三極管のみ。五極管やビーム管は音の歪みが大きくて使えないというのが今井さんの得た結論だった。だが、現在、日本国内では真空管は製造されていない。そのため同社は商社経由で米国、中国、ロシアから輸入している。

部品では、トランスも重要だ。「真空管アンプの音質の善し悪しはトランスで90%決まる」とまで今井さんは言う。そのため今井さんは3年の歳月をかけてオリジナルのトランスを開発し、信頼できるメーカーに製造を委託している。

だが、いくら高品質の真空管やトランスを使っても、組み立てや調整が不十分だと、いい音質は得られない。今井さんはできる限り電流の通過損失が少なくなるように、何度も何度も配線図を書き直す。そのため配線図を書く作業に専念しても、10日くらいはかかるという。「スロベニアで試聴会を行ったとき、プリント基板は使っていないと説明したら、信じてもらえなかったので、アンプの中を見せたら拍手と歓声が起きましたよ」

## この3年は地獄だった

組み立てではは んだ付けの作業が重要だ。コテを当てる、はんだを付ける、はんだを離す、コテを離す、という基本動作や、はんだの組成や量、コテの温度管理などは、経験を重ねて体に覚えさせるしかないと今井さんは言う。「腕がいいと、付けた後のはんだの光沢がいいし、富士山のような形をしているものです」

ちなみにオーディオテクネでは、妻の富子さんや長男の浩亘さんも今井さんからはんだ付けの作業を教わってきた。おかげで今では今井さんに優るとも劣らない腕前だ。

真空管アンプをつくるようになって30有余年。この間、今井さんはレコードプレーヤーやスピーカーもつくってきた。いずれも基本は受注生産だが、スタンダードなモデルでアンプの価格は87万5,000円。スピーカーも40万円以上する。だから飛ぶように売れるというわけにはいかない。しかも今井さんは、製品の価値を認め、納得した客にしか売らないという姿勢を堅持しているため、セールストークはしないのがモットー。質問には誠実に答えるが、とにかく実際に音を聞いてもらうのが一番だと考えている。

組み立てる前、部品に帯電防止の導電性塗料をていねいに塗っていく。

左から妻の富子さん、今井さん、長男の浩亘さん。

「デフレ不況が続いたこの3年は地獄でした。年に2台くらいしか売れなかったこともあります。何度も『もう辞めよう』と思いましたよ。家族3人だけの家内工業だから何とかやってこられたようなものです」

## オーディオのフェラーリ

一方、知名度やブランドにかかわらず、いいものはいいと評価する欧州では、同社の製品は高く評価されている。とくにオペラの本場、イタリアでは、オーディオ雑誌や音楽雑誌が何度も今井さんを取り上げているほどだ。今井さんの写真がオーディオ雑誌の表紙に掲載されたこともある。オーディオテクネの製品は「オーディオのフェラーリ」と称され、今井さん自身は「オーディオのマエストロ」と呼ばれているそうである。現在はイタリアの代理店経由で、欧州各国に輸出をしている。

「昨年までの間の円高はきつかったですね。でも昨年、ポーランドの人がうちの製品を買って、オーディオショーに出品したところとても評判がよかったため、現地に試聴室をつくってくれました。そこに置く製品をこの秋に出荷する予定です」。今井さんがうれしそうに語る。

本物の音を少しでも多くの人に聞いてもらいたいという理由で、今井さんはすべての技術をオープンにしている。購入客には配線図面も渡している。「どんどん、真似をしてほしい」とまで言い切る。実際、オーディオテクネの製品にそっくりなものが出回ったこともあった。だが、そこから聞こえてくる音は、似て非なるものだったという。

本物の音をつくる本物の匠の技は、やはりそう簡単に真似できるものではないということだ。